

上長瀬遺跡現地説明会資料

～ 名張市上長瀬 ～

2012年9月23日

三重県埋蔵文化財センター



調査（遺構掘削）風景

【はじめに】

上長瀬遺跡は、名張市最南端の上長瀬地区にあり、山間部を流れる名張川上流の右岸段丘上にある遺跡です。ここから南に名張川を遡ると約2 kmで津市美杉町太郎生^{たろお}になります。太郎生地区には、中世（鎌倉～室町時代）の遺跡が多数所在しています。特に著名なものとして、平清盛の曾孫^{ひまご}である六代の伝承がある五輪塔^{ごりんとう}や日神石仏群^{ひかわ}、また以前は太郎生日神不動前の山王権現社境内にあり、明治40年に太郎生瑞穂^{くにつ}の国津神社に移された十三重の塔などがあります。それらは、いずれも鎌倉時代の石造物として知られています。その太郎生からさらに遡ると、奈良県御杖村に入り伊勢本街道にあたります。つまり上長瀬地区は、伊勢本街道と名張市の盆地平野部を結ぶ交通路上に位置しています。

それでは、調査によって見つかった内容を見ていきましょう。

【屋敷跡】

今回の調査で、鎌倉時代前半（およそ 800 年前）の建物跡が 3 棟見つかりました。3 棟は別々のところがあり、建物の方向がきれいに揃っているため、これら全体で 1 つの屋敷跡とも考えられます。建物の付近には、土坑（ごみ捨て穴）^{どこう}（直径約 1 m の円）が見られます。建物は「掘立柱建物」^{ほったてばしらたてもの}といい、柱を直接地面に埋め込んで建てています。柱穴の中には、「根石」^{ねいし}といって、柱が沈み込むのを防ぐための石が埋められているものもあります。

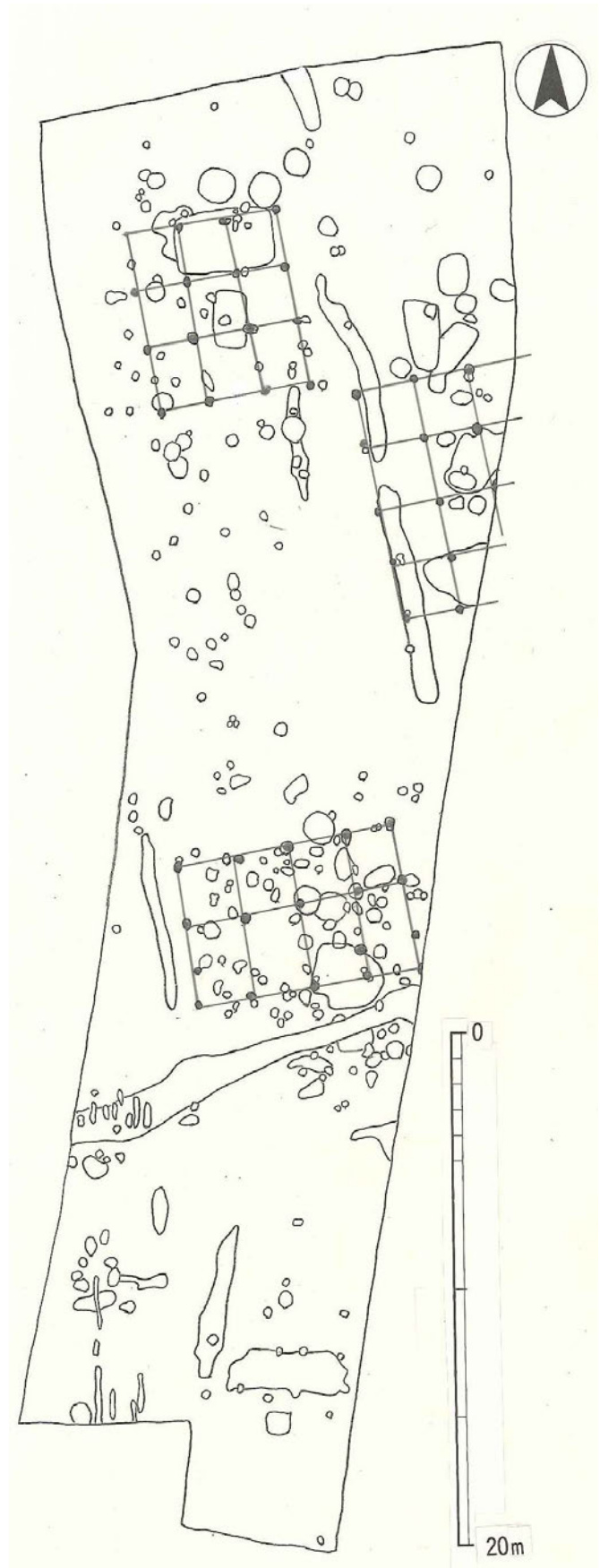
また建物の中に大きな土坑（4 m × 2 m 程度）が見られます。この用途は、台所や厩^{うまや}などが考えられています。



根石のある柱穴



建物内の土坑



線で結ぶ は、掘立柱建物の柱穴

調査区平面図



瓦器（皿・椀）

【東海地方の土器】

近畿地方で瓦器が多く使用されていた時期と同じくして、東海地方では「山茶椀^{やまぢゃわん}」と呼ばれる陶器が多く使われていました。山茶椀は知多半島や渥美半島でつくられたとても固い土器で、三重県では、伊勢平野側で多く見つかった中、ここ上長瀬でも、渥美産の山茶椀が1点、練鉢が1点の合計2点が見つっています。また南伊勢産の土師器鍋も数点見つっており、伊勢方面との交流があったことがうかがえます。



温石

【瓦器】

瓦器^{がき}は、表面を燻して焼いた灰黒色の素焼きの土器で、平安時代末～室町時代にかけて近畿地方を中心に生産されました。今回出土したものは、鎌倉時代のものです。当時、食器として使われていたものです。今回の調査では最も多く出土した土器で、この遺跡を特徴づけるものです。奈良や京都に近い伊賀の遺跡からは、瓦器が多く見つっており、この上長瀬の地も、畿内の文化圏であるということが見てとれます。



土師器鍋・山茶椀

【温石】

温石^{おんじゃく}とは、現代でいうとカイロです。温めた石を布などで包み懐に入れていたようです。石には紐を通す穴もあけられています。この温石は、もとは九州産の石鍋で、割れてしまったことにより、温石として転用したようです。伊賀において温石が見つかったのは初めてで、大変珍しい出土品です。

【おわりに】

今回の調査は国道の改良工事に伴って実施したもので、発掘調査面積も決して大きくはありません。しかし、名張川上流域の発掘調査は、太郎生地域では実施されていますが、名張市側では今回が初めてです。この調査によって、鎌倉時代に人々の生活が営まれていたことが分かりました。

荘園が盛んに形成された平安時代後期において、上長瀬を含む名張川山間部は、御杖村まで伊勢神宮領に属していました。また遺跡のすぐ南にある国津神社と名前を同じくする国津神社が、太郎生にもあります。これらのことから、鎌倉時代のこの遺跡が、太郎生の遺跡と何らかの関係があるということも十分考えられます。

上長瀬は、現在名張市においては、中心部から離れた山間部の地になりますが、当時は、山を越える交通の地として、伊賀や伊勢と強いつながりがあったと考えられます。

今回の発掘調査現地説明会が、東西を急峻な山に挟まれた山間の集落における人々の歴史に触れていただく機会になればと思います。



上長瀬遺跡位置図

(国土地理院数値地図 1 : 25,000 「倶留尊山」を使用)

調査遺跡名	上長瀬遺跡
所在地	三重県名張市上長瀬
調査面積	777 m ²
調査期間	平成24年7月25日～10月16日
原因事業名	平成24年度一般国道368号(上長瀬)社会資本整備総合事業
調査実施機関	三重県埋蔵文化財センター